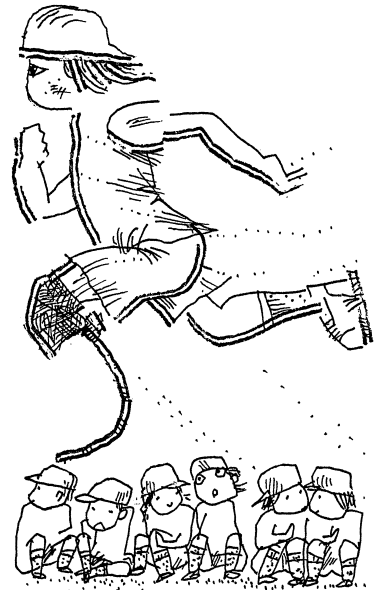


ほろもどち

四月。春休み明けの始業式が終わって、学級活動の時間。「て、転校生の、ほ、細井みどりです、よろしくお願います」

みどりは黒板の前に立って、緊張でぎくしゃくしながら頭を下げた。大勢の前で自己紹介なんて恥ずかしくて、しかも思い切り言葉がつかえてしまっ、耳が真っ赤になっっているのが自分でも分かった。そんなあいさつだったけれど、教室からはよろしく、といくつか声が返ってきて、ばちばちと拍手が響く。「それじゃあみなさん、細井さんと仲良くね。転校してきて分からないこともいっぱいだろうから、何かあったら手伝ってあげてください。細井さんも、クラスのみんなを頼ってね」



このクラス——四年一組の担任の大阪先生が言う。大阪先生は五〇歳ぐらいの小柄な女の先生で、眼鏡をちょこんと鼻にのせている。

「細井さん、ありがとう。席はあそこね」

五〇音順の出席番号で並んでいる机のなかで、今空いている席は一番後ろの列だった。ほっと息をはく。目立たなさそうで良さそうな席だ。ランドセルを持ってそそくさと席に着く。

先生の連絡が終わって放課後になり、みどりはさっそく数人の女の子に取り囲まれた。話しかけてくれるのはとても嬉しい。ただ、みどりはおしゃべりが苦手だ。もともと引っ込み思案で声も小さくて、おまけに緊張しいだから、せっかくな話しかけてもらえても、しどろもどろになっ

作 オカコウ
絵 アズイ・シュン